

# EDUCATION

## 学生はキャンパスで何を身につけているのだろうか

愛媛大学医学部附属総合医学教育センター長・教授  
小林 直人

### 1 はじめに

2019年末から始まったCOVID-19（新型コロナウイルス感染症）の世界的大流行は、世界中のあらゆる活動に「コロナ“禍”」と呼ばれる大きな影響を及ぼした。大学教育への影響も極めて大きく、特に2020年度の新学期は、学生がほとんど登学できないまま遠隔授業のみでのスタートとなった大学が多かった。新たな変異株の出現により「コロナ禍」の影響は2021年度も続いており、対面授業の実施や課外活動の許可などについて地域や大学による対応の違いが明らかになりつつある。

この結果、学生は経済面でも健康面でも学修面でも、様々な困難を抱えることとなった。特に2020年度・2021年度の新入生は、「正常」なキャンパスライフをほとんど経験できないまま学生生活を続けており、今後もその影響が長引くことが懸念される。「コロナ禍」での大学教育の取組については本誌 Education も含めて既に多くの報告や論考があるので、ここでは、筆者の所属大学での経験の報告集 [1] と、筆者も寄稿した本邦の医学教育における論文集 [2] を紹介するにとどめておく。

本稿では、筆者の経験と全国調査の結果をもとに、「コロナ禍」で新たに増えてきた、学生が抱えるさまざまな困難について考察する。さらにその所見から、学生はキャンパスで何を身につけているのかを改めて考えてみることにしたい。ここで「キャンパスで」と断ったのは、学生生活を送る場は教室だけではないためであり、「身につけている」としたのは、学生生活の意義は狭義の学習・学修にとどまらないからである。なお、筆者自身

の経験は医学部医学科の学生に限られるが、本稿での議論は特定の学部学科に限定したものではないと考えている。

### 2 「コロナ禍」で学生が抱えている困難

本稿を読んでくださっている皆様の大学（あるいは他の高等教育機関）では、2020年度以降、退学・休学の件数、あるいは留年生の数が、それ以前と比べて増えてはいないだろうか。筆者の所属する学科では、2020年度末での留年件数が例年よりかなり多く、また休学する学生数も増加傾向にある（ただし、大学によってあるいは学部・学科によって、状況は異なるようである）。その原因としてすぐ思いつくのは、「コロナ禍」によるキャンパス閉鎖で急遽導入された遠隔（リモート）授業に起因する、学業成績の不振とメンタルヘルスの問題とであろう。

2021年2月上旬に全国の大学生を対象に実施された大規模な学生調査（約3,000人が回答、回答率41%）[3]では、医療系学部で学生の集中度が下がったという。また、同じ調査から、学生同士の情報交換の不足から学習意欲が下がった学生がいることも指摘されている。この結果は、筆者の実感とも一致する。

遠隔授業を受講するためには、自宅や自室を含めた快適な環境が必要になることは言うまでもない。2020年11月に実施された全国医学部長病院長会議の調査（約6,600千人が回答、回答率11%）[4]では、「コロナ禍」でも1年生の約3分の2が「大学内に自習のためのスペースは確保されている」と回答している。ただし他の学年では同様

の肯定的な回答が半数に満たないので、多くの大学が新入生を優先して自習スペースを確保した様子が読み取れる。感染防御の観点からは自宅・自室で遠隔授業を受講することが望ましいが、学習支援という面では、キャンパス内にも、機械換気を含む防御策を十分に講じた学習スペースを確保することが必要であろう。

「コロナ禍」でのメンタルヘルスの問題は、特に新入生で深刻である。晴れ晴れとした気持ちで迎える入学式が突然中止となり、登学どころか引越もしないまま一日中パソコンの画面を眺めているだけの生活では、心身の健康を正常に保てる学生の方がむしろ少ないはずだ。もちろん、多くの大学では、新入生や低学年の学生を優先して登学させるなどの取組が行われており、経済的な支援だけではなくオンラインも含めた健康相談も強化されている。前述の自習スペースの確保もその一環であろう。

気がかりなのは、「コロナ禍」で課外活動に参加していない学生が増えたことである。筆者の所属大学で毎年実施されている全学部の新入生を対象としたアンケート調査では、7月の時点で「1週間のうち部活動やサークル活動の時間がゼロ」と回答した割合が2020年度の新入生では例年の3~4倍に達している。当然、部活動ができなかったのは新入生だけではなく、上級生も同様である。筆者の経験でも、部活のリーダー格でもともと社会的な活動性の高い学生が、1年以上にわたる入構制限や課外活動の制限のためか、メンタルヘルスの問題を抱えて修学が困難になるケースが複数見受けられている。

このような学業成績とメンタルヘルスの問題は、大学生活のスタート時に躓いてしまった学生の場合、少なくとも今後数年間は尾を引くことが懸念される。入学直後の成績が卒業時や国家試験の成績に直結するケースはしばしば指摘されるからである。筆者の学科では2021年度、修学状況に不安のある学生をこれまで以上に積極的に抽出して教職員らが面談にあたっている。幸いオンライン環境が学生・大学の双方で改善したので、キャンパスへの入構制限があっても面談の機会を持つ

ことができている。しかしながらこれが十分な効果を上げたかどうかは、数年待たなければ判断できないかもしれない。

### 3 「コロナ禍」で新たに見えてきた学生の困難

一方で筆者は、全く想定していなかった学生の問題に遭遇している。

2020年度から2021年度にかけて、遠隔授業についていけない、というよりも遠隔授業の課題を定期的に提出できない、という学生（特に新入生に目立つ）がかなりの人数いるのである。結果として複数の科目で不合格となり、留年に至った学生も少なくない。遠隔授業によって日々の提出課題が増えたことの是非はここでは論じない（これまでの課題が少な過ぎたかも知れないので）が、並行して開講されている多くの科目で毎週課される課題の提出がままならない学生がいることは看過できない。これは、単に課題が増えたことだけによるのであろうか。

事情を把握するため、数名の学生とは筆者もインタビューやメールでのやり取りを行った。その中で見えてきたこととして、彼らは登学する機会を失い、本来は教室で隣に座った学生同士や休憩時間中の何気ない会話、先輩との部活やサークルでの活動を通して伝わるはずの情報を得られず、周囲の学生の勉強の進捗状況も実感できず、また単位取得や進級に関わる修学上の規則が分からないまま取り残されてしまったようである。稀な事例だが、入学直後から遠隔授業のみとなり、それもリアルタイム受講ではなくオンデマンド型（非同期型）の授業が多かったため、何曜日の何限にどの授業が開講されるというルールを体感できなかった学生もいた。これはもはや真面目か不真面目かの問題ではなく、スケジュール管理を含めた自律的に学ぶための知識やスキル（自己調整学習力[7]の初歩と言えよう）における差ではないかと思われる。

このような困難を抱える学生は「コロナ禍」前から常に一定数いたはずである。しかしながら、毎日キャンパスや教室で同級生と顔を合わせているだけで、周囲の学生からの情報によって、ある

いは周囲で同級生が話している内容を何気なく聞いていることによって、彼らは自分が提出しなければならない課題の存在やメ切を知るようになる。自分のスケジュール管理の甘さや学習の遅れに気付かされることも多いだろう。その結果、知らず知らずのうちに必要な知識やスキルを身につけ、困難を回避していたのではないだろうか。

どうやらこのような能力には個人差が大きく、またいわゆる受験偏差値とはあまり相関が無いように思われる。多くの大学でスタディ・スキル(大学で学ぶための知の技法)を扱う初年次教育科目が導入されているものの、レディネス(学ぶための準備状態)の差が大きければ教員がクラス全体を相手にしても学習効果には限界がある。むしろ、学生同士や教員とのやり取りを通して個別に身につけられる場合が多いのではないだろうか。

筆者が強調したいのは、そのような自律的に学ぶための知識やスキルを身につける場としてのキャンパス、である。

#### 4 学生はキャンパスで何を「身につけて」いるのだろうか

筆者が所属する大学では、大学での学びの場を「正課(教育)」、「準正課(教育)」、「課外(活動)」に分けている。卒業要件となるカリキュラムが「正課」、部活動・サークル活動などが「課外」、そして両者の中間に位置していて、大学の教育戦略と教育的意図に基づいて教職員が関与・支援する教育・学生支援のことを「準正課」とよんでいる[5]。筆者は1988年(昭和63年)3月に大学を卒業しているが、医学科6年間の大学生活のうちの前半3年間は「正課」のカリキュラムに沿って(自分で言うのもなんだけど、結構)勉強した。逆に後半3年間は教室よりむしろ研究室に入り浸って、筆頭著者で英文論文を書き上げた[6]。これは卒業要件には含まれないし単位にすらなっていないので、愛媛大学という「準正課」に相当する。それに加えて「課外」では音楽部男性合唱団に入部し、毎年入学式に学生オケと一緒に歌っていた実績(武道館ライブ?)もある。「コロナ禍」で苦しんでいる学生には叱られるだろうが、幸いなことに

筆者は学生時代、大学が提供していた「正課」「準正課」「課外」の全ての機会を享受していたことになる。

だが、筆者が新入生だった頃を思い出すにつけ、今になって最も貴重だったなと実感しているのは、授業が休講になったときに同級生と学生食堂で「だらだらとしゃべっていた」経験なのである。そこで筆者が知らず知らずのうちに身につけていたのは、狭義の人格形成にとどまらない、学ぶためのスキル、ではなかったか。この課題はこう考えれば良い、この授業のためにはこういう本を読んでいる、過密スケジュールに効率的に対処するにはこうしたらいい、などなど。自分よりずっと優秀な同級生や良い意味で要領の良い同級生から、お互い気付かぬうちに多くのスキルを学んでいたのではないか。それは教室で講義を聴くのではなく、授業や試験のためにあるいは部活やサークル活動のために、または食事や買い物のために、キャンパスで過ごしていた時間であった。それがいかに貴重であったか、同様の感慨を覚える読者も少なくないであろう。

山田は青年期心理学を研究する立場から、キャンパスという空間や学生生活という時間において、教育以外に学生が学び成長する機会の意義を強調している[8]。筆者自身には、大学生を送ったキャンパスにおいて大学が意図的に提供した教育プログラムとそうではない機会との双方から、多くを学んだという自信があるし、双方を通じて身につけたスキルが今でも活きているという自信がある。だが「コロナ禍」は学生から、そのような場を奪ってしまったのではあるまいか。

学生生活4年間ないし6年間のうちの「コロナ禍」の2年間は大きい。学生のためにも、1日も早い収束を祈らずにはいられない。そして、限られた時間でも学生がキャンパスという空間でさまざまなことを「身につける」ことができるように、これまで以上に支援が必要だと痛感している。

#### 文 献

1. 特集「コロナ禍の愛媛大学、教育と学生支援」、大学教育実践ジャーナル20号(臨時増刊)、愛媛大学教育・

- 学生支援機構・刊, 2021年6月 <https://web.opar.ehime-u.ac.jp/books/j20/> (最終閲覧日: 2022年2月7日)
2. 「医学教育白書 2022 版」, 日本医学教育学会・監修, 篠原出版新社, 2022年4月刊行予定.
  3. 金子元久(研究代表者). コロナ禍後の大学教育—大学教員の経験と意見— (2021年3月12日), <http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/pdf/2021/コロナ禍後の大学教育.pdf> (最終閲覧日: 2022年2月7日)
  4. 全国医学部長病院長会議. 2020年医学部・医学科学生アンケート調査 [https://ajmc.jp/wp/wp-content/themes/ajmc/documents/pdf/activities/research-committee/hakusyo\\_2020.pdf](https://ajmc.jp/wp/wp-content/themes/ajmc/documents/pdf/activities/research-committee/hakusyo_2020.pdf)(最終閲覧日: 2022年2月7日)
  5. 愛媛大学. 準正課教育 [https://www.ehime-u.ac.jp/campus\\_life/ex-study/](https://www.ehime-u.ac.jp/campus_life/ex-study/)(最終閲覧日: 2022年2月7日)
  6. 小林直人: 今, 研究室で実験をしている学生の皆さんへ—自分の研究の限界を書いてみる—, Education. 日本生理学雑誌 77: 83-85, 2015
  7. 松山 泰: 「医学部教育における自己調整学習力の育成—専門職アイデンティティ形成からの視座」, 福村出版, 2021年8月
  8. 山田剛史: 学生の学びと成長を止めないニューノーマル時代の学生支援, カレッジマネジメント, 227: 6-9, 2021

「教育のページ」は学部学生, 大学院生, ポスドク, 教員などを対象に, 生理学教育に関する取り組みや意見を紹介することを目的としています. 原稿は Web (日本生理学会ホームページ) 上にも掲載されます. 皆様のご投稿をお待ちしています. 投稿規程は [http://physiology.jp/magazine/contribution\\_rule/](http://physiology.jp/magazine/contribution_rule/) をご参照ください.